



Title	「プロテスタンティズム-資本主義論争」をめぐる戦後の研究動向:ヘルベルト・リューティの所説を中心に
Author(s)	石坂, 昭雄
Citation	北海道大學 經濟學研究, 30(1), 195-213
Issue Date	1980-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31488
Type	bulletin (article)
File Information	30(1)_P195-213.pdf



[Instructions for use](#)

「プロテスタンティズム—資本主義論争」 をめぐる戦後の研究動向

——ヘルベルト・リューティの所説を中心に——

石坂昭雄

I 序——論争の流れ——

マックス・ウェーバーの数多くの論文の中で、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》」ほど論争の対象となったものはあるまい。プロテスタンティズムと経済的進歩の相関に着目したのは、ウェーバーをもって嚆矢とするわけではなく、古くはシャルル・ド・ヴィレールやギゾーに始まり、ベルギーの経済学者で自らプロテスタントに改宗したベルギーのエミール・ド・ラヴレー、ドイツのシェル、フォン・ヘルトリングなどウェーバーの同時代人にいたるまで、多くの論者がカトリック諸国の経済的衰退、アングロサクソン、ドイツの優位、フランスにおけるプロテスタント企業家の活躍などを取上げて来たのであり、この事実はむしろ一つの常識といって良い位であった⁽¹⁾。しかし、この両者の歴史的関連を、理解社会学の手法を駆使しつつ、明快に呈示したのはウェーバーの大きな功績であり、社会学的、歴史学的研究の出発点となった。だが、この論文は、発表以来、それから4分の3世紀を経た今日にいたるまで、多大の論議を喚んだのであり、これに関連した論文・著作の数は、個別事例研究も含めてドイツ語圏はもちろん、英仏語、さらにはオランダ語、イタリア語等にいたるまで、500点を越え、これを収録した論文集だけでも5種類⁽²⁾に上っている。先ず、ウェーバーの生前(1920年まで)、ブレンターノ、フォン・ペロー、ラッハファール、フィッシャー、ゾンバルトといった、当時の錚々たる歴史学者や経済学者が批判に立上り、ウェーバー自身も反論を執筆したり、『宗教社会学論集』にこの論文を加えるに当っ

ては、反批判の注を多数挿入している。他方、ウェーバー支持に廻ったのは、神学者エルンスト・トレルチ、経済学者ではシュルツェ＝ゲファーニッツである。⁽³⁾ 両大戦間期に入ると、論争は全ヨーロッパに広がって行く。フランスでは、フランスに戻ったストラスブール大学神学部のハルプヴァックスが1925年にこれをフランスに紹介し、オゼール、セー、ゴワヨー、ルージエが、またスイスでは、セュー、ドゥメルグ、イタリアではファンファーニ、アメリカではパースンズ、イギリスではトニー、ロバートソン、オランダではバインズ、ファン・ヒュンステレン、エンノ・ファン・ヘルデルらが、それぞれこの問題について発言をしている。⁽⁴⁾ その際に注目すべきことは、マルクシズムの側からの発言は殆んど見られなかったことで、例えばグルトウイゼンはこの問題を全く扱わなかったし、ボルケナウも、ウェーバーの「孤立化して因果関係を求める」isolierend-kausal 方法に一言批判を述べたに止っている。⁽⁵⁾ これらの論議の中で、ウェーバーは孤立無援気味で、とりわけ歴史家が激しい反撥を示したのに対し、基本的にその意義を認める側には神学者や社会学者が多かった。その理由は、いろいろ考えられるが、何よりも先ずウェーバーの用いた諸概念・方法に対する無理解ないし誤解を挙げねばならない。ウェーバーは、マルクシズムの一元論＝経済決定論に対する反証・批判を度々試みており、彼自身の関心も一つにはここにあったといえる。しかし、ウェーバーは、マルクスの「経済構造」に代えるに、宗教倫理をもってし、別の一元論を構築したわけでは決してなかった。然し、ウェーバーの所説は、彼がプロテスタンティズムの倫理をもって、資本主義成立の決定的要因としたものと解されたのである。しかも、ウェーバーは、「資本主義」を「市民的経営資本主義」der bürgerliche Betriebskapitalismus に限定し、その不可欠の条件 sine qua non たる合理的経済態度 die rationale Wirtschaftsgesinnung の母胎となった「資本主義の精神」の形成と関わる限りで、工業的中産層と信仰＝経済倫理の関連が溯って追求されているのである。従って、ここでは、プロテスタンティズム一般ではなく、結局カルヴィニズム（というより17世紀のピューリタニズム）および幾つかの^{セツテ}教派のみが分析の

対象となっていた。しかも、「資本主義の精神」にしろ、「禁欲的プロテスタンティズム」にせよ、理念型として提示され、その関連の意味の解明を目指していたのであった。然し、批判者の側は、「資本主義」一般、とりわけ、商業資本あるいは政商資本主義を念頭に置いたのみならず、具体的歴史的因果関連、とくにカルヴァンの教義がいかんして資本主義の精神を生みこれが資本主義形成をどう促したか、という問題にすり換えてしまった。

第2に、資本主義といい、カトリシズム、プロテスタンティズムといい、とりわけ価値観が混入し易いし、また感情的対立が持込まれ易い論題であった。ウェーバー自身は、少なくともその論考の中では種々の宗派に対する価値判断を下したわけではなかったにせよ、いわば経済進歩に貢献しなかった、あるいは阻止的役割を演じたとされるカトリック・ルター派からは当然反撥が見られた。ところが第一次世界大戦後、「資本主義」という語にある種の悪しき評価が込められるようになった時、カトリック側は次第にウェーバーのテーゼを認め——カトリシズムは、資本主義の形成に何等責任を負う必要がなかったから——るようになったのに対し、ルター派は中立的、そして、正統的カルヴィニズム（とくにスイス＝フランスの）がもっともこれに反撥した。たとえば、1959年に、カルヴァン生誕350年、ジュネーブ大学創基300年を記念してジュネーブの神学者で経済学者であるアンドレ・ビエレールが、カルヴァンの経済・社会思想に関する大著を著し、カルヴァンにはウェーバーやトレルチの考えたような、予定説をはじめとする一連の経済倫理が見出せないことを主張する⁽⁶⁾。

さて、第二次世界大戦後、ウェーバー・テーゼをめぐる論争の状況も一変した。もちろん、かのミュラー＝アルマックの大著『宗教と経済』*Religion und Wirtschaft. Geistgeschichtliche Hintergründe unserer europäischen Lebensform* (Stuttgart, 1959) が1959年に刊行され、またオランダでも、戦後すぐにベールリングの批判論文 R. F. Beerling, *Protestantisme en Kapitalisme etc.* (Groningen, 1946) が現れているが、これはむしろ戦前の仕事であり、ヨーロッパでは「プロテスタンティズム—資本主義」論争はす

っかり鳴りをひそめてしまったかに見えた。とりわけ西ドイツでは、敗戦＝東西分割、そして「経済の奇蹟」の中で、この問題に対する関心は失われ、また東ドイツでも取上げられることはなかった。そして、1963年のウェーバー生誕100年記念シンポジウムの宗教社会学部会でも殆ど論じられていない⁽⁷⁾。こうして、この問題の研究は、全体としてアメリカが主役となり、しかも幾つかの新しい方向に拡散して行った。即ち、①アジア＝アフリカ、ラテン・アメリカなどの非キリスト教世界における宗教＝経済倫理と経済発展について、たとえば、ウェルトヘイム、ベラー（日本およびトルコ）、ゲルナー（北アフリカ）、ギーアツ（インドネシア）、エイムズ（セイロン）、ロダンソン（イスラム）などの諸研究⁽⁸⁾、②現代社会における信仰と経済的態度ないし経済的地位の研究、たとえばマクレランド、リップセット、バンディックス、レンスキー、ホーホウェルフ、シュミットヘンなどによるもの⁽⁹⁾。③科学とプロテスタントイズムの関連、たとえば、マートン、カーニー、ホーイカース等⁽¹⁰⁾。④ピューリタニズムに関する諸研究、とりわけ、ビュレル、ウォルザー、ジョージ夫妻、ラウブザー、リットル、コルコ、ハドソン、ヒルなど⁽¹¹⁾、である。しかし、こうした分野は、ウェーバー・テーゼの応用領域ないし周辺部分に属し、本来のテーゼを正面から取上げてはいないのである。こうした中で第二次大戦後、正面からこのプロテスタントイズム—資本主義の歴史的関連を正面から扱った数少ない文献として、ヘルベルト・リュートイ Herbert Lüthy (1918—) と、トゥレヴァー＝ローパー (1914—) を挙げるができる。両者は60年代には全く独立に論文を発表し続けたにもかかわらず、その主張はある点で一致している。スイスの有名な経済史家であるリュートイは、ドイツ・フランス語双方で、幾つかの論文を発表し、フランスの社会学者でウェーバー研究者であるジュリアン・フロイントと論争を展開している他、イギリスの評論、『エンカウンター』(1964年)に寄稿して自説をイギリスの読者に紹介しているし、また彼のフランス語の論文集は、英語に訳されアメリカで出版されている。そして、イスラエルの社会学者のアイゼンシュタットは、その編纂したウェーバー論争の論文集にこれを収録したのみな

らず、リューティの主張を援用している。以下、本論文では、リューティの所説およびこれに対するフロイントの批判を紹介しつつ「プロテスタンティズム—資本主義」論争の論争点に光を当ててみたい。⁽¹²⁾

II リューティの所論

リューティ自身が意図しているところは、彼の論文の副題、「ある社会史の論争の誤ち」*Über Irrwege einer sozialhistorischen Diskussion* からも窺われるように、ウェーバーの方法論や社会哲学を問題にせず、専らこの60年間の論争の出発点、あるいは論争の中で形作られて来た誤った問題設定を正し、これを正しい軌道に戻すことにある。以下リューティの論点ごとに行論を追って行くことにしたい。

(1) 概念上の混乱 ウェーバー・テーゼを構成する方程式の両辺、プロテスタンティズムと資本主義は、双方とも多義的で、ウェーバー自身の用語法も伸縮自在であった上、論争者達は思い思いの意味内容を込めて議論を進めて来たことに混乱の基がある。

先ずプロテスタンティズムの方であるが、ウェーバーは、プロテスタンティズム一般を説いているように見えて、実はカルヴィニズム（および、教派としてメソディズム、再洗礼派＝バプティズム、敬虔派、オランダの改革派）にその対象を絞り、しかもその倫理を問題としている。そして、カルヴィニズムといっても、実は17世紀イギリスのピューリタニズムであり、1647年にピューリタン革命の最中に出されたウェストミンスター信仰告白をもってその教義を説明している。しかし、これはビエレルがカルヴァンの教説を仔細に検討し明らかにしたように、カルヴァン自身の考え方とは大きく隔たり、またこの信仰告白は革命のスローガンであるからどこまで実際の生活実践に影響を持ちえたか大いに疑問である。また資本主義の「精神」を、18世紀の啓蒙思想家でフリーメーソンの、しかも海の彼方のベンジャミン・フランクリンに代表させているのも恣意的で、たとえば、ジャック・サヴァリー (Jacques Savary. 『完全な商人』 *Le parfait négociant* の著者) は、彼がカト

リックであったせいか、一言も触れられていない。

ウェーバーの場合、終生研究目標としていたのは、西欧近代文明の独自の意義の解明であった。彼は、宗教社会学の展開においても社会経済史的研究においても、マルクスとは異り、社会の経済構造を土台とは考えず、それぞれの文化領域に固有の意義を認めていた。にもかかわらず彼が近代西欧文明を資本主義という、甚だ多義的で、スローガンに似た言葉で表現したのは何故か。彼は、この近代西欧文明の基礎をなす、徹底的合理化 *Durchrationalisierung* が、すぐれて資本主義的经营——官僚制と資本計算に支えられた——によって実現したと考えたためである。(彼の近代西欧文明に対する態度は両面指向的で、一面ではこの徹底的合理化を賞讃するが、他方でその行きつく先に対する不安ないし反撥が見られる。ある意味で、このウェーバーの書は、プロテスタントの自己批判の書といえぬこともない。)

この近代資本主義の物的諸条件は、何も近代西欧にのみ初めて生れたものではなく、すでにヘレニズム、ローマ、アラブ、インドや中国にも見られた。にもかかわらず資本主義が開花しなかった理由としては、合理的経済態度の欠如が挙げられる。ここにプロテスタンティズムと資本主義との結びつきが認められることになる。このように、ウェーバーは近代西欧社会の独自な特質の中から経済的的局面のみを抽出し、これと宗教改革とを繋いだことによって、ウィッテンベルクの教会の扉に貼りつけられた95カ条から、デトロイトのコンベアースシステム、あるいはスタンダード石油まで、本質的因果関連が辿れるかの如き印象を与えた。ウェーバーが何故このような問題接近をとったのか。そこにはマルクスの史的唯物論の影が落ちている。周知のようにウェーバーは、かの論文の中で意識的に史的唯物論批判を投げ、逆方向の因果関連の存在、あるいは禁欲的プロテスタンティズムが資本主義発達の反映とは認めがたいことを力説する。恐らく彼は、宗教改革を第一次ブルジョワ革命として理解し、ピューリタン革命やフランス革命に結びつける、通俗的・教科書の歴史観——それはマルクス主義者だけでなくブルジョワ的史家の方も見られるが——に我慢がならなかったのであろう。彼がわざわざ資本主義

の語に固執したのもこのためではないか。

しかし、経済的進歩と合理的経済態度との関係は、卵と鶏のようなもので、両者を孤立させて議論するよりも、もう一度出発点に立ち還って、宗教改革およびその深遠にして複雑な効果を、単純であるが真実ではない教科書的図式から救い出すことが肝心である。

(2) **プロテスタンティズムと経済進歩** ところで、ウェーバーの出発点となったのは、19世紀末ドイツ社会における信仰と社会層との関連であり、彼は自ら、東部ドイツにおける農業労働者調査で、ポーランド人のドイツ人居住地域への浸透 *Unterwanderung* を分析しているが、「プロテスタンティズムの倫理」の冒頭では、1895年のマルティン・オッフエンバッハーの、バーデン大公国における信仰と社会層の関連を扱った学位論文 *Konfession und soziale Schichtung* を素材に、プロテスタント系住民が資本所有、実業系上級学校への進学、上級の職種への上昇意欲で、カトリックに勝っていることを明らかにしている。このようなことは、何もバーデンに限ったことではなく、二つの宗派が混在する地方、たとえばリュートティの母国スイスでも、実にはっきり認められる。また、カトリックが圧倒的なフランスでも、少数のプロテスタントから経済（産業・金融）のみならず、政治家・知識人としても多くの成功者が輩出し、貧しい南フランスの農業地帯にあってさえ、彼等はその地域のエリートである。またアイルランドでもプロテスタント農民は特権を失った後も少数ながら活動的エリートの地位を占めている。もちろん、このことは、プロテスタントが、異端的少数派であったことから一部は説明がつく（古代の教父の言のように *opportet haereses esse!*）。だから、直ちにその理由を教義に結びつけるのは性急である。しかし、中近東のユダヤ人はじめ少数民族＝宗教集団、あるいはイギリスのカトリック教徒のように新しい社会・経済的発展の酵母となりえなかったものも見られる。結局、プロテスタントの方は個人主義的で外部の制裁によらず自己規律を持し、聖書愛読家であったから、周囲の圧迫によく耐ええたのである。この他、歴史上ではオランダとベルギー、あるいはアングロ・アメリカとラテン・アメリカ

の対比など、事例はいくらでも追加しよう。だが、注意しなければならぬことは、ウェーバーの見解を支持する例証の多くが19世紀に関するものであり、その間、宗教改革から数えて3世紀にもなる。従って、この経済進歩の差を宗教改革に溯らせることはできないだろう。資本主義、技術、その他諸諸の近代文明の諸側面は、宗教改革以前からカトリック教会支配下でも相当の発展が見られたのであったが、反宗教改革で旧くからの中心地の経済的・知的発展が圧殺され、後進地域だったプロテスタント諸国に新しい舞台が開けたからに他ならない。(但し、カトリック諸国のうちフランスのみは、ナント勅令廃止までは、例外的存在であった。)従って、近代の工業社会と、宗教改革とを一直線に結びつけるのは馬鹿気ているといわねばならない。

(3) 宗教改革の社会・経済史的意義 宗教改革は、当初、決して特定社会層との結びつきを見せてはいなかったし、いわんやブルジョワジー〔市民〕のみの運動ではなかった。もちろん、諸都市でプロテスタント側に移行したものは、多くは司教の支配から解放されんがためであった。フランスのプロテスタンティズムも、都市のブルジョワジーのみならず、貴族・農民・知識人などあらゆる社会層を含んでいた。しかるに、プロテスタントの敗北後、貴族はカトリックに復帰し、農民も牧師や教会を喪った後、南フランスの一部を除き消え去った結果、ユグノーに占めるブルジョワジー（唯一の自立可能な社会層）の比重が著しくなったのである。ところで、プロテスタント諸派のうち、カルヴァン派はその教義の上でも世俗権力からの自立を標榜していたのみならず、彼等が世俗権力を掌握するのに成功した例は殆どなく、反宗教改革の嵐の中で、ハンガリーからスコットランドまで全ヨーロッパのカルヴァン派集団は、一つの反カトリック権力のインターナショナルを組織していた。彼等の共和主義的精神はこうした試練の中で形成されて行ったのであり、これこそフランス絶対王制の憎んだところであった。彼等のこうした世俗内活動は、その散住地域に止らず、そして当初の衝撃が失われた後も、近代社会の形成に大きな役割を果たした。カルヴィニズムと近代工業社会との関連で重要なのは、資本主義形成そのものよりも、こうした自律的個人の形

成が、酵母の働きをした点に求められる。

(4) 職業理念および予定説 マックス・ウェーバーは職業理念を、プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」を結び媒介環としている。しかし、フランス語系カルヴァン派には、「召命」Beruf に当る聖書の訳語は見当らなかったのみならず、予定説にこのような役割を与えることも妥当ではない。そもそもカルヴァンの教義の中で予定説は決定的な重要性を帯びておらず、また同時代のカトリック——たとえばジャンセニズム——でも信奉されていた。この予定説がカルヴィニズムの中で大きくとり上げられるのは、17世紀の危機に際してのことで、いわば破滅の時代の絶望感を形而上学的に表現したものに他ならない。この予定説は個々人の孤独化・内面化を促しはしても、世俗内禁欲と職業労働への刺戟にはなりえないだろう。そして、カルヴァン派の人々は、むしろ、危機の中で、旧約聖書の・予言者の伝統を愛好し、選民意識をもって自らを支えていたのである。

従って、資本主義に適合的な経済倫理を生んだのは、むしろ「労働の聖化」Verheiligung der Arbeit の方に求めるべきであろう。中世のスコラの経済倫理は、現物経済的＝身分的編成を前提としており、そこから不可避的に生ずる貧窮者を犠牲者と考えていた。従って彼等を慈善によって扶養する義務があった。そして、労働の勤め ora et labora も、修道院のようにできるだけ経済行為から遠ざかり、富や奢侈を棄てるよう仕向けることにあった。それに対して、ジュネーヴ、チューリッヒのような商工業都市を基盤にしていたカルヴァンは、営利（＝生計維持）を是認し、労働の意味づけを変えた。即ち、労働能力がありながら慈善を受けることは悪に他ならなかった。彼等は救貧院に収容し生産的労働に就かせるべきであった。そして、企業家（工業家や商人）も人々を就業させる役割を担っていた。この点で、資本を富一般、従って怠惰・悪の源としか看ず、せいぜい慈善で幾分償われるものとしか認めなかったカトリックと対蹠的である。カルヴィニズムの浸透していたところいずこでも自主的工業化が容易であったのは正にこうした精神的雰囲気^{シユクテーツレツン}の賜であった。そして、これを欠く場合、たとえコルベールが国策として

権力的に推進しても工業化は至難であった。(ジャンセニズムにもブルジョワジーとの結びつきは認められるが、彼等は利子生活者＝官職保有者を基盤にしており、決してカルヴィニズムの代役は果し得なかったのである。)

(5) 利子論 オゼールを始めとする通説では、カルヴァンが初めて生産信用を消費信用から区別し、5%以下の利子を認めたとされている。もともと、ジュネーヴの大手では、司教＝都市領主アルデマール・ファブリが1387年の「ジュネーヴ大手特権」Privilèges de Foire de Genèveにより、大手を訪うものに聖俗を問わず、利子徴収を認めており、カルヴァンの行ったのも、先ず高利の禁止であった。しかし、徴利一般についてのカルヴァンの考え方は、時々により異なり、ある時には無利子貸借を賞め、ある時には衡平法 Loi d'équité で逃げていたが、1567年のクロード・ド・サション Claude de Sachin 宛の手紙では、資本(流動資本)が生産の一要素であることを認め、生産信用を許容した。その際、彼は貧者による富者への預託を引き合いに出し——いささか強引な論法であるが——論証を試みていた。この手紙は与える反響が大きいため公開を控えることになったが、彼の死後1575年、テオドル・ベーズによって公開に踏み切られた。1571年のサン・バルテルミーの虐殺を逃れてジュネーヴに亡命して来たフランス人の生産者達が乞食同様の救貧を受けることを拒み、生業資金の貸付を求めて止まず、ジュネーヴ市当局も遂にこれに応ずることになったのがその切掛けである。

Ⅲ フロイントの批判とリュージェの反論

リュージェの論文(1964年のフランス語によるもの)に対して、批判を加えたのがフランスの社会学者ジュリアン・フロイント⁽¹³⁾である。彼は、リュージェの論文に幾つかの点で新しい解明(カルヴァンの労働観や利子論)があったことは評価しつつも、全体として、ウェーバーの所論を最も俗化された誤解と混同して批判し、とりわけ、次の5点でリュージェがウェーバーを正しく理解していないことを強調する。1°ウェーバーが取上げているのは、カルヴァンの所説そのものではなく、その150年後のカルヴィニズムであるか

ら、カルヴァンそのものの教義がウェーバーの理解と喰い違うことを指摘したピエレルの研究は、批判の根拠にはなりえない。(それは1900年代の新カント学派の理解をめぐって、カントを引合いに出すに等しい。) 2° リューティは、「資本主義」ならびに「プロテスタンティズム」が曖昧な概念であるとして攻撃するが、ウェーバーはこの多義性を十分承知していたからこそ、理念型という方式で混乱をさけようとしたのである。しかも、この理念型は、リューティのいうような「一切の歴史的色彩」 *toute contamination historique* を締め出すものではなく、またこれは「観念的モデル」や「創出的原理」 *principe createur* では決してない。ウェーバーは、理念型から構成される概念と歴史の関連を絶えず追求していたのであり、複雑な現象の総体をよく把握するためには、一つの視点からする理念型に止まらず、他の視点の理念型をも構成する必要があることを認めている。3° ウェーバーは、ある宗教の教義と経済的帰結の間の直接的因果関係あるいは函数関係を認めただけではなく、多くの決定要因の一つ、しかも構成的要素の一つである経済倫理と宗教・生活態度との関連を問題にしているに過ぎないこと。4° リューティは、合理化をウェーバー社会学の鍵と見ているのは正しいが、禁欲の方は見落している。恐らくリューティはゾンバルトを經由してウェーバーに近付いたためそうなったのであろう。5° ウェーバーの思想的立場を、「熱狂的パン・ゲルマニスト」「ドイツの世界的使命を信奉していた」とし、ポーランド人問題やオッフエンバッハーのバーデンの調査がウェーバーの出発点にあったとするのは正しくない。(オッフエンバッハーはウェーバーの指導である学位論文を纏めたのであり、ウェーバー自身大きな全体構想はすでにでき上っていた。)

これに対するリューティの反批判は、同じ号に掲載され、彼はフロイントに対しかなり長文の反駁を加えている。リューティは自分の論文が、ウェーバーの方法論や哲学を問題にしているのではなく、この論争の中ででき上ってしまった、過度の歴史の単純化、通俗化を論難したのであるとする。ウェーバーの原論文においては、その中に含まれる解釈の曖昧さが自覚されていたのだ

が、論争の中では、俗化され、因果関連にすり換えられてしまった。しかも、ウェーバー自身、1920年に長い脚注で付言した時も、反対者に論駁しても、支持者の誤解を解く努力はなされていない。しかも、ウェーバーは「プロテスタントイズムの倫理」を対象としているかに見えて、実はイギリスのピューリタニズムにこれを限定している。しかも、ウェーバーの理念的に構成したプロテスタントイズムの規定の中心に職業理念と予定説があるが、このBerufというルター的言葉をカルヴァン派は無視して来ているのだ。また、資本主義の語を、近代の合理的資本主義に限定しているが、これも、恣意的用語法といわねばならない。方法論上の問題がどうであれ、要は歴史的事実の解明が問題であるが、ウェーバーはこの論文で一体何を目指していたのか。単に両者の関連の意味を理解するだけなのか。その場合、すでに関連の存在を前提にし、その意味理解はとりも直さず、因果関連解明の一つの作業に他ならない。そもそも理念型とは、発見的・直覚的なものたらざるを得ないが、これを歴史に適用するに当っては、史実として明白なものとは矛盾しているのかどうか検討して見る必要があろう。そうして見れば、ウェーバーのここでの理念型は、矛盾を内包しないという必要条件を満たしていない。プロテスタントイズムは、あまりに狭く解せられ、「疑似」あるいは「後」カルヴィニズムの意味、ほぼ啓蒙思想と同義語となっているし、資本主義の方は、果しなく拡大されて、西欧文明全般の問題をすべて含むにいたっている。

およそ、概念やモデルを構成すれば歴史の経験的事実と隔離を見るのは避けえないことであるが、問題はこれに止らない。ウェーバー社会学の大きな成功は、その異った理念型の相関——そして史的因果関連——への大胆な、単純化された適用にあったのだ。最後にリュートイは、トゥレヴァー＝ローパーやブーヴィエの研究を挙げながら、反宗教改革あるいはカトリック体制下のフランス・アンジャン・レジームが経済発展をいかに阻害したかを強調しつつ、研究を正しい軌道に乗せるためには、反宗教改革の社会・経済体制の研究を深めることが第一であることを強調する。

これに対してフロイントは68年の、ウェーバー 宗教社会学を解説した論文（「マックス・ウェーバーによる経済倫理と世界宗教」⁽¹⁴⁾）において、リュートイの見解を次の二点で反論している。第1に、彼がカルヴィニズムの基底にありとする旧約的予言者の精神について、フロイントは、こうした予言者の運動が最も盛んだったのは再洗礼派で、カルヴァン派にあっては初期——ウェーバーの扱った時期ではなく——に一定の重要性を持ったに過ぎない、こうした予言者の精神は、政治上、基本的役割を果たしたにせよ、禁欲と異って、生活の合理化を促す力とはなりえなかった、とみる。第2の、宗教改革に対する低い評価（せいぜい障害を取除いただけであるとする）、そして、反宗教改革による繁栄の転移からプロテスタンティズムと資本主義との繋りを説明しようとする試みに対しては、資本主義がカルヴィニズムないしピューリタニズムの盛んな国で勃興したことを積極的に説明することにはならないことを指摘し、具体的歴史的様相の解明に当って反宗教改革を一つの要素として導入したとしても、ウェーバーの全体的構想と何等矛盾するものではないことを付加える。⁽¹⁵⁾

IV 結 び

リュートイの所論は、必ずしも明快ではなく、論争を通して見ても、その筋を追うことは容易ではない。しかも、彼の批判せんとしているのが、ウェーバー自身の主張よりも、論争の中で単純化されてしまい俗論化された歴史理解、つまりマルクス主義のアンチ・テーゼたる、宗教による資本主義形成への説明である。しかも、資本主義の概念ないし、その形成についての史実認識がウェーバーと異っているため、リュートイの批判が多くの点で不毛に終わっている。（ウェーバーは、何よりもその担い手を工業的中産層に求めているのに対し、リュートイは、中世以来、カトリック社会の中に資本主義的發展が見られたとしている。）従って、反宗教改革によるプロテスタント諸国の経済的興隆の説明も、せいぜい、アントウェルペンの破滅とアムステルダムやハンブルクの勃興を説明しえても、新しい産業企業家層とカルヴィニズム

や敬虔派、メンノーニズムやクウェーカーとの親和関係を解く手だてにはなりえないであろう。(さらに反宗教改革が何故特定地域でのみ勝利を取めたかは、これ自体、政治史・社会＝経済史的関連で解明されるべきであろう。)

それにもかかわらず、リュートイはいくつかの点で重要な問題提起をしているといえる。第一には、ウェーバーのこの論文の構成の問題である。ウェーバーは冒頭の「信仰と社会層」のところでは、19世紀末のドイツ、そして歴史上の様々の事例に言及しつつ、プロテスタンティズム一般と経済的進歩との親和関係を認めている。にもかかわらず、彼が最後に解明したのは、17世紀イギリスのピューリタニズム(再洗礼派などは別にして)、とりわけ、リチャード・バクスターに依拠してのことであった。その場合出されて来る当然の疑問は、このピューリタニズムが、どこまでカルヴィニズムを体現しているかということである。かの予定説を最も頑強に貫こうとした正統派カルヴィニズム(ユグノー、スイス、オランダ、ドイツなどの改革派)にこうした「禁欲と資本主義の精神」の連関が妥当しうるのか。大陸の場合、イギリスと異って予定説は消失した18世紀末ないし19世紀初頭が資本主義形成期として重要であるとすれば、それに代りうるものは何か。第2に信仰と社会層との結びつきに関してもウェーバーは、工業的中産層と禁欲的プロテスタンティズムの親和関係を前提に議論を進めているように思われる。然し、宗派と社会層との関連——たとえば、フランスのユグノーや南ネーデルラントのカルヴァン派——は非常に複雑であり、禁欲的プロテスタンティズムの経済倫理に及ぼした影響も実に多様であった。とすれば、イギリスのピューリタニズムの場合にのみ、こうした資本主義の精神形成への意図せざる貢献が生じたのか。ウェーバーは、教義の側からの作用に限って論じているけれども、そこには当然、担い手となる社会的基盤の影響、教義の変容を認めるべきであろう。

ウェーバー自身も、教義が社会的・文化的諸条件、とりわけ、経済的諸条件によって深く影響されていたことを十分に認めているし、また禁欲的合理主義の功利主義への解体の跡を、歴史的に、かつ個々の普及地域に即して究

明すべきことを認めていたが、かの論文では、17世紀イギリス・ピューリタニズムの事例に止めていた。この点で、リュートイの「労働の聖化」の提示は、恐らくはスイス、カルヴィニズムを念頭に置いた別の解釈といえるだろう。またウェーバーは、禁欲的プロテスタンティズムの近代文化への貢献に、単に、合理的な生活態度の創出に止らず、政治的意識の変革をも含めていたのは明白であり、資本主義の形成＝社会の近代化におけるプロテスタンティズムの役割を歴史的に追求する際にはこの側面をも併せて考察する必要があるだろう。リュートイは、フランスのユグノーの反権力的、自立的な性格の方を重要視するが、この主張は、必ずしもウェーバーの所論の否定とはならないだろう。

これまでの75年間にわたって、ウェーバーに対する全体的、あるいは部分的な批判が数多く出され、その多くが出发点からの無理解や誤解に基き、論争を著しく不毛なものにしたのは残念である。しかし、他方で、経済史ないし宗教社会学の側も、ウェーバーの提示した枠組を具体的な歴史的過程に適用し、これを補正して行く努力を欠いて来た。即ち、ウェーバーの依拠した諸宗派の教義理解がどこまで妥当するか、そして、16世紀末から18～9世紀に及ぶ様々の禁欲的プロテスタンティズムの普及地域における資本主義の精神の形成がどう進んだかを究明してこそ誤解・無理解をも含めて、これまでの論争の枠組から正しい軌道に戻すことになるだろう。

- (1) Villers, Charles de, *Essai sur l'esprit et l'influence de la Réformation de Luther* (Paris 1804); Guizot, F. P. G., *Histoire de la civilisation en Europe* (Paris, 1828); Laveleye, Émile Louis Victor, Baron de, *Le Protestantisme et catholicisme dans leurs rapports avec la liberté et la prospérité des peuples*, Extrait de *Revue de Belgique*, 1875 (Bruxelles: C. Muquardt, 1875), 39 p.; do., *De l'avenir des peuples catholiques: étude d'économie sociale* (Paris: Baillière, 1875), 2nd éd. avec les opinions de Gladstone, Michelet, Quinet, d'Hulst et de quelques autres (Paris; G. Fischbacher, 1898), 111 p.; Hertling, Georg Freiherr von, *Das Princip des Katholicismus und die Wissenschaft: Grundsätzliche Erörterungen aus Anlaß einer Tagesfrage* (Freiburg i. B.: Herder, 1899), iii+102 p.; Schell, Hermann, *Der Katholicismus als Princip des Fort-*

- schrittes* (Würzburg: A. Göbel, 1898), 114 p.
- (2) この論争および関連文献については、拙編“Bibliography on the Protestantism-Capitalism Controversy,” *Hokudai Economic Papers*, VIII (1978—9)を参照されたい。この中には、大学紛争の経験から宗教改革を再評価する McCormick, T., “The Protestant Ethic and the Spirit of Socialism”, *British Journal of Sociology*, XX-3 (1969), pp. 262—276, まで含まれる。
- (3) G. von Below, *Die Reformation und der Beginn der Neuzeit* (Historische Bibliothek, 38, 1917); L. Brentano, *Die Anfänge des modernen Kapitalismus* (München, 1916); W. Sombart, *Der Bourgeois* (Leipzig-München, 1913); G. von Schulze-Gaevernitz, *Britischer Imperialismus und englischer Freihandel* (Leipzig, 1906); Fischer, K. H., “Kritische Beiträge zu Prof. M. Webers Abhandlungen: ‘Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus’”, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, XXV-1 (1907); pp. 232—242; Rachfahl, Felix, “Kalvinismus und Kapitalismus”, *Internationale Wochenschrift für Wissenschaft, Kunst und Technik*, III, No. 39 (1909), pp. 1217—1238; No. 40, pp. 1249—1268; No. 41, pp. 1287—1300; No. 42, pp. 1319—1334; No. 43, pp. 1347—1366; Troeltsch, E., *Die Bedeutung des Protestantismus für die Entstehung der modernen Welt* (München—Berlin: R. Oldenbourg, 1911).
- (4) Halbwachs, M., “Les origines puritaines du capitalisme moderne”, *Revue d'histoire et de philosophie religieuse*, 5 (2) (mars-avril. 1925), pp. 132—154; Hauser, H. “A propos des idées économiques de Calvin”, *Mélanges de l'Histoire offerts à Henri Pirenne* (Bruxelles, 1926); I. Robertson, H. M., *Aspects of the Rise of Economic Individualism. A Criticism of Max Weber and His School* (London: Cambridge University Press, 1933), xvi—233 p., repr. N. Y., 1959; H. Sée, “Dans quelle mesure Puritains et Juifs ont-ils contribué aux progrès du capitalisme moderne?”, *Revue Historique*, CLV (1927), pp. 57—68; Tawney, R. H., *Religion and the Rise of Capitalism* (London: Murray, 1926); Enno van Gelder, H. A. “Geen kapitalisme en hervorming”, *Tijdschrift voor Geschiedenis*, XXXVII (1922), 353—382; Fanfani, Amitore, *Cattolicesimo e protestantesimo nella formazione storica del capitalismo* (Milano, 1934); Goyau, G., *Une Ville-Eglise: Genève, 1535—1907* (Paris: Perrin, 1919), 2 vols.; Rougier, L., “La réforme et le capitalisme moderne”, *Revue de Paris* (September-October 1928); Van Gunsteren, W. F., *Calvinismus und Kapitalismus* (Amsterdam, 1934); Parsons, T., “H. M. Robertson on Max Weber and His School”, *Journal of Political Economy*, XLIII-1 (October 1935), pp. 688—96; Sayous, A., “Calvinisme et capitalisme: L'expérience genevoise”,

- Annales d'histoire économique et sociale*, VII (1935), pp. 225—244; Beins, E., “Wirtschaftsethik der calvinistischen Kirche in der Niederlanden 1560—1650”, *Nederlandsch Archief voor Kerkgeschiedenis*, N. R., XXIV-2 (1931).
- (5) F. Borkenau, *Der Übergang vom feudalen zum bürgerlichen Weltbild* (Paris, 1934), S. 208; B. Groethuysen, *Die Entstehung der bürgerlichen Welt- und Lebensanschauung in Frankreich* (Halle, 1927).
- (6) A. Biéler, *La Pensée économique et sociale de Calvin* (Genève, 1959).
- (7) 但し、西独でも、ウェーバーの「プロテスタンティズム」やフィッシャー、ラッハフェールとの論争を収録した Siebenstern 版のペーパーバックスが1965年に、また、ミュンヘン大学ウェーバー研究所の C. Seyfarth と W. M. Sprondel を編者とする関係論文抄録, *Seminar: Religion und gesellschaftliche Entwicklung. Studien zur Protestantismus-Kapitalismus-These Max Webers* (Suhrkamp-Taschenbuch, 1973) が出るなど、漸く関心が復活して来たように見える。なお、東独では、筆者の知る限り、J. Kügel, “Die protestantische Ethik und die Entstehung des Kapitalismus. Zur Kritik der Religionssoziologie Max Webers”, *Wiss. Zeitschr. der Univ. Jena*, Gesellsch. und Sprachwiss. Reihe, 19, 1970 が出ているがまだ入手していない。
- (8) Wertheim, W. F., “La religion, la bureaucratie et la croissance économique”, *Archives de sociologie des religions*, VIII-15 (Janvier-Juin 1963), pp. 49—58; Bellah, R. N., “Religious Aspects of Modernization in Turkey and Japan”, *American Journal of Sociology*, LXIV (1958), pp. 1—5; Rodinson, M., *Islam et capitalisme* (Paris: Seuil, 1966.), 304 p.; C. Geerts, “Religious Belief and Economic Behavior in a Central Javanese Town”, *Economic Development and Cultural Change*, IV, No. 2 (1956), pp. 134—158; Ames, Michael, “Ideological and Social Change in Ceylon”, *Human Organization*, XXII, No. 1 (1963), pp. 45—53; Gellner, Ernest, “Sanctity, Puritanism, Secularization and Nationalism in North Africa”, *Archives de Sociologie des Religions*, VIII, No. 15 (1963), pp. 71—86.
- (9) D. C. Maclelland, *The Achieving Society* (Princeton, 1961); Lipset, S. M. and Bendix, R., *Social Mobility in Industrial Society* (Berkeley, 1959); Hoogwerf, A., *Protestantisme en progressiviteit* (Meppel, 1965); Schmidtchen, G., *Protestanten en Katholiken* (München-Bern, 1973).
- (10) R. Merton, *Social Theory and Social Structure* (Glencoe, Ill., 1949); H. F. Kearney, “Puritanism, Capitalism and Scientific Revolution”, *Past and Present*, 28 (1964); R. Hooykaas, *Religion and the Rise of Modern Science* (Edinburgh, 1972).

- (1) S. A. Burrel, "Calvinism, Capitalism and Middle Classes", *Journal of Modern History*, XXXII (1960), 129—141; George, C. H. and Catharine, *Protestant Mind of the English Reformation 1570—1640* (Princeton, 1961); Hill, C., *Puritanism and Revolution* (London, 1958); M. Walzer, *The Revolution of the Saints* (Cambridge, Mass., 1965).
- (12) リューティ教授の詳しい経歴は不明であるが、スイスのサンクト・ガレンに生れたドイツ系スイス人で、一時ジャーナリストとしても活躍し、スエズ戦争当時のフランスを分析した *Frankreichs Uhren gehen anders* (Zürich, 1954) は、英・米・仏でも翻訳され高い評価を受けている他、フランスのユグノー系銀行に関する浩瀚な研究 *La Banque Protestante en France de Révocation de l'Édit de Nantes à la Révolution* (Paris, 1959—1961), 2 vols. で知られている。彼は1959年にチューリッヒ工科大学の歴史学教授に、71年にバーゼル大学のスイス史の教授に任ぜられている。彼のこの問題についての論説の一部は、*Banque Protestante* に展開されている他、主要なものは以下の通りで、内容は殆ど同一である。cf. G. R. Elton, *Reformation Europe* (London, 1963); S. N. Eisenstadt, "The Protestant Ethic Thesis in an Analytical and Comparative Framework", in do. (ed.), *The Protestant Ethic and Modernization: A Comparative View* (New York, 1968).
- ① "Protestantismus, Kapitalismus und Barmherzigkeit", *Der Monat*, IX Jrg., nr. 130 (Juli 1959), pp. 14—25.
- ② "Nochmals: 'Calvinismus und Kapitalismus'. Über die Irrwege einer sozialhistorischen Diskussion", *Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, X (1961), pp. 129—56.
- ③ "Calvinisme et capitalisme: après soixante ans de débat", *Cahiers Vilfredo Pareto* (2), décembre 1963. Article repris dans *Preuves*, 161, juillet 1964 et, remanié, dans *Le Passé présent* (Monaco and Paris, 1965):
- ④ "Once Again: Calvinism and Capitalism", *Encounter*, XXII, No. 1 (January 1964), pp. 26—38.
- ⑤ "Protestantismus und Kapitalismus. Die These Max Webers und die Folgen", *Merkur*, XIX (1965), pp. 101—119, 226—242.
- (13) Freund, Julien et Lüthy, H., "Controverse sur Max Weber", *Preuves*, No. 163 (September 1964), pp. 85—92.
- (14) J. Freund, "L' éthique économique et les religions mondiales selon Max Weber", *Archives de sociologie des religions*, XIII (1968), 8—25.
- (15) この他、*Encounter* への寄稿に対して、Benjamin Nelson の行った批判 "In defence of Max Weber", *Encounter*, XXIII-2 (1964), 94—5. とこれに対する Lüthy の回答, XXIV-1 ("Max Weber—Luethy's Reply") は、投書欄を用いて

いることもあり、短いものであって、Freund とも重複するので紙幅の都合上、割愛したいが、ネルソンの新しい論点は、プロテスタンティズムにおける旧約聖書への回帰の問題で、ネルソンは、ピューリタンがモーゼの律法に基礎を置くような急進派に激しく反対したこと、また宗教改革の主要なリーダーも、ことごとく、中世的伝統への復帰に向う極端な改革運動に反対していたことを挙げている。これに対してリュウティは、予言者的伝統はモーゼ的律法主義とは異なることを反論している。

- (16) イギリスのピューリタニズムに関しては、竹内幹敏、越智武臣、最近では梅津順一の諸氏の研究、またウェズリーについては岸田紀氏の研究があるが、大陸側については、ウェーバー・テーゼの実証検討の仕事は、我国はもちろん、ヨーロッパにおいても決して十分とはいえない。